

後漢皇帝の旧畿巡行研究

安 川 俊 介

一、はじめに 研究の意義

現在、日中両国で使用されている「観光」という単語の語源は、『周易』観卦の爻辞⁽¹⁾にあり、しかも二〇世紀初頭、両国に欧米より現在のようなレクリエーションの意を含む観光概念が入る以前、「観光」という単語は、現在とは異なる語義で解釈されていたことが、先賢の研究⁽²⁾により明らかにされている。『周易』は難解の為、昔からいくつかの注釈が施されてきたが、鶴田雅昭⁽³⁾が指摘するように、「観光」が、本来「視察」を表す単語であったとすれば、君子の領国巡行も一種の「観光」行為に当たる。本文は、中国・後漢時代（紀元二五―

二二〇）の歴代皇帝の旧畿巡行⁽⁴⁾（前漢帝都長安および周辺地域への巡行）について、史家と異なる視点から、その観光行動の意図の解釈を試みる。

そもそも後漢王朝は、前漢王朝を篡奪した王莽⁽⁵⁾（前四五―紀元二三）政権の否定を、その存立理由の起点とする。王莽の行った数々の変革を退け、劉氏皇帝を頂点とする行政秩序の回復を目指した運動こそが建国者・光武帝⁽⁶⁾（在位紀元二五―五七）の闘争であり、結果、広く人民の支持を得た彼は、漢王朝再興を成し遂げる。しかし自身率いる討伐軍旗揚げ時より一貫して「漢王朝再興」の旗幟を掲げてきた光武帝が、なぜ帝都・長安を捨て置いて洛陽に都したのは長年検証されず、この洛陽

遷都の実情を探究する研究者も少ない。事実、王莽が帝政の実権を掌握していた期間を含む、前漢・後漢王朝交代期（＝兩漢之際）の政治的混乱を直接記録する史料は、動乱規模や人的被害が空前規模であった割に少なく、洛陽遷都に至る背景事情や、同時期の長安の実情を解明するには、動乱記事以外の周辺記事をも含めた史料分析と、「兩漢之際」の動乱期の、さらに前後の期間の政治、経済の動態分析が必要である。

後漢皇帝の旧畿巡行は、一義的には、栄光の長安王朝を継承する、正統な劉氏皇帝の地位確認のための祭祀挙行が目的であったと考えられる。しかし、記録に残る後漢王朝の歴代皇帝の巡行旅程を個別精査すると、当時の世相だけでなく、王朝統治集団の様々な政治的意図の存在が見て取れるのである。

二、後漢王朝初代・光武帝旧畿巡行の実情

後漢王朝の歴代皇帝が、帝都・洛陽を離れ、旧都・長安を訪れ、旧畿を巡行し、宗廟を祀り、各種祭祀を主宰

する意図は、民衆に対して長安王朝（前漢王朝）の正統な後継者としての地位を誇示することにあつたことは、間違いないであろう。この巡行を、皇室の恒例行事として定着させたのは後漢王朝開祖の光武帝にほかならない。彼は王莽の横死前後に、各地で勃発した「起義」の動きに呼応して決起し、当初は他の「起義」勢力同様、帝都・長安の掌握を目指した。しかし、様々な事情、部下の献言により初衷を改め、長安掌握を一旦棚上げし、いにしへの周王朝以来、象徴的価値^⑦高く、領有によって自己の勢威向上が期待できる洛陽をまず押さえ、当地で即位の儀を経て称帝に至る。中国史上、後漢王朝はこの時点から開始（紀元二五）であり、じつは光武帝は即位（称帝）時点において、各地の割拠勢力の平定はおろか、長安の掌握も成せていなかった。その後彼は、数々の激戦を制して徐々に自身の勢力圏を、王莽執政期の版図に近づけていく。光武帝による最初の旧畿巡行は、長安平定後まもなく、未だ益州^⑧など一部地域に、独立勢力が残存する状況下で挙行された。

○光武帝の旧畿巡行

史書の記録によれば、光武帝は自身の在位期間中、計六度旧畿を巡行している。初回は、長安制圧から間もない建武四年（紀元二八）であり、このとき光武帝は、初めて皇帝の立場で長安を訪れる。かつての留學時代以来の訪問であった。光武帝が前漢高祖の靈廟を祠り、前漢歴代皇帝陵を詣でる政治的意図は、当時の各界輿論に対しての、自己の統治の正統性主張の一環と考えられる。

翌々年二度目（建武六年）の巡行は、視察というよりも、軍役の色彩が濃い。当時、長安こそ掌握（⁹）赤眉党の鎮圧（¹⁰）したものの、依然として隴西には隗囂（¹¹）生年不詳—三三〇、漢中には延岑（¹²）生年不詳—三三六、蜀には公孫述（¹⁴）生年不詳—三三六）等が独立勢力として健在であり、時にこの三者は連携して光武帝に抵抗し、隙あらば長安を窺う情勢であった。光武帝は自身の根拠地・洛陽を守るためにも、西の長安を死守しなければならず、督戦のため自ら長安城に進駐し、この時、同地において攻略責任者（建威大將軍）に耿弇（¹⁵）二一五八）を任命し、計七將に討伐軍を率いさせ、蜀の地へ進発させている（¹⁶）。

建武十年（紀元三四）の三度目の巡行を経たのちの、建武十八年（紀元四二）の巡行は、光武帝および後漢王朝統治集団にとって特別な意味合いを持つ巡行となった。この通算四度目の巡行に先立つ建武十二年（紀元三六）、帝は蜀の地で最後まで抵抗を続けていた公孫述を滅ぼし、ようやく王莽以来の国内の混乱を収束させ、全国平定を達成していた。別章にて詳述の通り、この四度目の旧畿巡行の際の、帝の旅程、当地で出された詔勅、行事について、史書は比較的詳細に記録している。

この最も記念行事の色彩の強い四度目の巡行以外では、崩御前年の旧畿巡行（六度目・建武中元元年）が興味深い。それまでの巡行において前漢十一陵を欠かさず詣でてきた光武帝が、僅かに高祖（前漢高祖・在位前二〇六—前一九四）と呂后（高后・前二四一—前一八〇）を合祀した長陵（¹⁸）参拝のみで帰京（洛陽帰還）しており、一代の英傑の、当時の心身の衰えを彷彿とさせる。

○明帝、章帝、和帝、安帝、順帝、桓帝の旧畿巡行
後漢王朝二代・明帝¹⁹(在位五七―七五)以降は、各帝
在位中一度きりの旧畿巡行となる。これは初代・光武帝
の時代のような、自勢力優位をめざして前漢王朝の権威
との繋がり強調する、といった政治的意味合いが薄れ、
旧畿巡行が、新帝の登基を、列祖列宗に報告するという、
儀礼的意味合いを持つようになった証拠であろう。即ち、
光武帝生涯の努力によって、後漢・洛陽王朝の権力盤
がようやく固まったことを意味している。

先ず、明帝は、即位から三年目の永平二年(紀元
五九)、旧畿巡行に出発する。父が生前行ってきた高廟²⁰
および十一陵参拝に加え、前漢の名臣として名高い蕭何
(前二五七―前一九三)、霍光(生年不詳―前六八)の墳
墓に人を遣わして墓前祭祀をとり行い、また、帰路は
河東に立ち寄り、(窮民救済のため)合計二千石の恩
賜を發し、役人として取り立てた。これら明帝の行跡は、
子の章帝(在位七五―八八)以下、歴代皇帝に巡行の手
本として継承されていく。

尚、順帝(在位一二五―一四四)、桓帝(在位一四六

―一六七)の旧畿巡行は、宗廟訪問よりも、この明帝を
先例とする洛陽より長安までの区間の、沿道窮民救済の
色彩がより濃くなり、史書の関連記録も、祭祀より糧食
配給記録が目立つようになる。安帝(在位一〇六一
―一二五)崩御後、後漢王朝は幼年皇帝が続き、外戚・宦
官の専横が目立つようになり、王朝は衰亡への道をたど
り始める。これら糧食配給記事の増加から読み取れるも
のは、もはや旧畿巡行が、巡行本来の意図から逸脱し形
骸化していく有様である。そして桓帝の巡行(延熹一年・
紀元一五九)を最後に後漢皇帝による旧畿巡行は途絶す
る。

三、後漢王朝・洛陽宮室の長安回歸運動

史書の記録する後漢王朝歴代皇帝による、計十二回
に及ぶ旧畿巡行の中でも、初代・光武帝による四度目(建
武十八年)の巡行時の祭祀および長安城再建事業、四代・
和帝(在位八八―一〇五)による永元三年(紀元九一)
旧畿巡行時の詔書の内容は、共に比較的明確に長安復興

の意義を強調している。これに当時の政治動向を重ね合わせる、後漢統治集団は光武帝期より和帝期に至る間、長安への宮室回帰を志望していた可能性が高く、特に光武帝執政期と、後述の章帝執政期後半より和帝親政開始までの時期の二度、長安回帰はかなり具体的に検討されていたことが読み取れる。

(建武十八年)三月丁酉、(光武帝)行至長安。經營宮室，傷愍舊京，即詔京兆，迺命扶風，告觀園陵。凄然有懷祖之恩，喟乎以思諸夏之隆。遂天旋雲遊，造舟于渭，北旂涇流。千乘方輶，萬騎駢羅，衍陳於岐、梁，東橫乎大河。瘞后土，禮幽郊。其歲四月，反于洛都。明年，有詔復函谷關，作大駕宮，六王邸，高車廐於長安，修理東都城門，橋涇、渭。往往繕離觀，東臨霸、滻，西望昆明，北登長平，規龍首，撫未央，視平樂，儀建章。(『後漢書』卷八〇「文苑列傳」引『論都賦』二五九六—二五九七頁)

(建武一八年)三月丁酉、(光武帝の)視察は長安

に至った。宮室を修理し、以前の都を悼み、直ちに城下に向けて詔勅を下し、また、扶風では当地の人々に齋戒を命じて敬意に至らしめ、先帝の陵墓を参観した。帝は列祖列宗を偃び、心中痛ましく思い、当地のかつての隆盛に思いを馳せ、深く嘆息した。続いて帝は、天を廻る雲のように、舟をあつらえて渭河を渡り、涇水を北に向かつて遡上した。千の車輛と、万の騎兵が帝に付き従った。岐山、梁では隊列を整えて威容を示し、東に向かつて黄河を渡った。供物を埋めて地を祀り、幽の郊外・甘泉では天を祀った。四月、帝は洛陽に帰還した。翌年、帝は詔勅を発して、函谷關を修復し、行宮、六王邸宅を再建し、長安の車馬の馭舎規格を高く改め、東都の城門を修理し、涇水、渭水に橋を架けた。方方の離宮を修復し、東は霸水、滻水に至り、西は昆明池を望み、北は長平坂を登り、龍首山の治山を命じ、未央宮にて民を宣撫し、平樂觀を視察し、建章宮にて儀式をとりおこなった。

(永元三年)冬十月癸未、(和帝)行幸長安。詔曰：「北狄破滅，名王仍降，西域諸國，納質內附，豈非祖宗迪哲重光之鴻烈歟？寤寐嘆息，想望舊京。…」十二月，復置西域都護，騎都尉，戊己校尉官。(『後漢書』卷四「孝和孝殤帝紀」一七二—一七三頁)

(永元三年)冬、十月癸未、(和帝は)長安を視察した。詔勅に曰く、「北狄は破れて滅し、名だたる王どもは悉く降った。西域諸國は人質を差し出して服属したが、これを、かつての列祖列宗の強烈なる威光によるところではない、と言えるだろうか？

(朕は)日夜感嘆し、旧都を思い慕うのである。…」
…十二月、西域都護、騎都尉、戊己校尉官の官職を復活した。

先述の通り、光武帝は巡行に先立つ建武十二年(紀元三六)、蜀の公孫述を滅ぼし念願の中国平定事業を完成させていた。帝の自身四度目の巡行の目的は、長安および周辺の歴代前漢皇帝の陵墓を祀って列祖列宗に大功告

成し、また漢の皇帝として中国再統一を宣言し、天下に漢王朝復興を誇示することであった。

但し、光武帝の巡行目的は、漢王朝復興宣言のためだけではなかった。この時、帝は敢えて陸路を使わず船舶を調達して渭水の支流のひとつ・涇水を溯上し、周王朝伝説の地・豳²²(びん)にまで足を運び、また豳以外の長安畿内諸地域も精力的に訪問している。現代、我々の注意は、往々にして史書の文飾に引き付けられがちで、光武帝の豳をはじめとする諸地域への巡行を、祭祀と解釈することが多い²³。しかし実際は、帝の巡行の意図は周の史跡探訪のためだけではなく、長安畿内および周辺諸地域の主要河川、運河、沿岸港の情況など、物流施設の「検分」だった可能性が高い。即ち帝は、政治的パフォーマンスだけでなく、長安城の経済を支える主要インフラ視察を、巡行の目的としていたのである。尚、この時、光武帝の視察した地理範囲が、冀朝鼎²⁴(一九〇三—一九六三)の提唱する前漢王朝の「關鍵經濟區」(Key Economic Area)と完全に一致することは、特筆に値する。

一方、和帝の永元三年（紀元九一）の旧畿巡行の目的は、やはり主に西域支配権の回復を前提とした漢王朝の勢威の誇示にあった。当時朝廷の実権は和帝の父・章帝の外戚・竇氏を中心とした三輔⁽²⁵⁾、隴西出身官僚の手にあり、竇憲（生年不詳—九二）らによる北匈奴遠征の成功とも相まって、これら官僚の発言力は大となり、彼らが主導する形で、朝廷内でも宮室の長安回帰が検討されるようになっていた。但し巡行の一年後、和帝は武装クーデターを発動して竇氏一派を駆逐し親政を開始したため、これら動向と機を一にして帝都の西遷（長安遷都）輿論は、一気に下火となってしまった。

後漢朝廷内における長安回帰輿論と、反対輿論による論争は、班固（三二—九二）の『兩都賦』発表時⁽²⁶⁾をピークに次第に盛り上がり欠いていく。さらに五代・安帝期に入ると隴西羌族の關中地区進出⁽²⁷⁾が勢いを増し、これらの猖獗に手を焼いた和帝の外戚・鄧氏を中心とする官僚の主唱で、朝廷では西域の主権放棄および撤退が議論されるようになる。⁽²⁸⁾この時、鄧氏一派の主張は採用されず、漢王朝は引き続き西域経営に取り組むことを閣

議決定するのだが、これ以降、朝廷内における長安回帰論は完全に立ち消えとなる。

四、試論 後漢皇帝・旧畿巡行の区分

○第Ⅰ期 光武帝の巡行

後漢王朝の創業者である光武帝は、自身の勢威増大のため、前漢王朝⇨長安王朝の権威を最大限に利用した。これは光武帝が考案した策戦というよりも、王莽横死時⁽²⁹⁾点で、劉氏皇帝を名乗る者が、光武帝を含めて四人も存在したことから判るとおり、当時、他に先んじて前漢帝都・長安を掌握することが、漢王朝復興の正統な担い手であることをアピールする最も効果的な方法だったことを示している。当時の民衆の立場からいえば、それだけ王莽の新政による社会的混乱に人々が倦んでおり、かつての栄光の劉氏皇帝の時代への回帰が、社会全体で期待されていた、といえる。第Ⅰ期は、新しい統治集団が、自己の統治力量増強のため、旧権威を利用すべく、旧都および周辺地域を詣でた時期である。

○第Ⅱ期 明帝・章帝・和帝の巡行

明帝は父・光武帝の事業を引き継いだ後、的確な施政によって帝都・洛陽を中心とする政治体制・経済体制の基盤を固めた。洛陽王朝の経営は軌道に乗り、長安の旧權威を政治的に利用する必要はなくなった。これより先、皇帝自らによる旧畿巡行は、表面上前漢王朝Ⅱ列祖列宗を祀る形を採ってはいるものの、実は後漢王朝の創業者・光武帝の足跡を偲び、光武帝の偉業を讃えているのである。同期は、章帝の外戚・竇氏を中心とした長安周辺および西方を本貫地とする、所謂「西方官僚」が朝廷内にて権力を伸長させていく時期にも該当する。この時期、後漢王朝は、ようやく国力充実し、前漢・武帝（在位前一四一―前八七）の時代に奪取した西域領土の回復に着手する。但し、結果前漢王朝の命脈を縮める直接原因となった西域経営復活を警戒し、これを是としない洛陽以南・以東諸地域出身官僚と、宮室を長安に回帰させ、再度の西域諸地域への経営資源投資へと繋げたい西方官僚との間の対立は深まり、結局、前者を支持した和帝が、クーデターによって後者を駆逐する形で決着をみる。第

Ⅱ期は、後漢王朝が自らの政治体制を安定させていく過程において、長安王朝（Ⅱ前漢王朝）とは異なり、王朝経営が完全に「函谷關以東」⁽³⁰⁾の政治勢力に掌握されていく時期に当たる。この時期より、名実ともに後漢王朝は、「東漢」⁽³¹⁾王朝となるのである。

○第Ⅲ期 安帝、順帝、桓帝の巡行

先述のとおり、当該時期より後漢王朝は幼年皇帝が続き、外戚・宦官の専横が目立つようになり、王朝は衰亡への道をたどり始める。特筆すべき政治現象としては、この時期より帝国の西北勢力圏外より、陸続と周辺諸民族が帝国領内に侵入を開始する件を挙げる⁽³²⁾ことができる。この現象の原因については、帝国の消極的な西域経営姿勢によるものとする学説⁽³³⁾や、当該地域の気候の寒冷化・乾燥化が進んだためとする学説が提唱されているが、現代中国歴史地理学研究者間では、後者を支持する意見が、やや優勢のようである。⁽³⁴⁾当該時期の旧畿巡行記事に、沿道窮民救済活動が目立つ原因も、単なる巡行の形骸化だけではなく、流民の大量流入が関連している可能性が

ある。

○光武帝が宮室の長安回帰を断念した理由

光武帝の覇業は、漢王朝の篡奪者・王莽の排除と、正統なる劉氏による王朝復興を大義名分としていたために、一方で帝は、趙翼⁽³⁵⁾(一七二七—一八一二)の指摘するとおり、漢王朝復興の旗幟を利用して広範な民衆の支持を集め、迅速に中国の再統一を成し遂げることができた。しかしもう一方では、高祖以来二百年余りの歴史と伝統を持つ長安の再建という宿題を背負い込むことになった。光武帝は、少なくとも建武十八年の四度目の巡行までは、長安城への宮室回帰を含めた前漢時代の京畿・關中地区の復興を目指していた可能性がある。つまり建武初年の洛陽定都は、あくまでも長安復興を達成するまでの暫定措置だったことになる。

ところで王莽が横死した前後、光武帝を含め劉氏皇帝を名乗った者は四人にも上ったが、光武帝は、この中で長安城一番乗りを果たしたわけではない。一番乗りは緑林党であり、緑林党に担ぎ上げられた劉玄(更始帝・生

年不詳—二五)であった。この時光武帝は、長安城内や周辺地域には、ほとんど軍餉(兵糧)が残っていないことを熟知しており、自身は長安への進軍を控え、後に緑林党に代わって赤眉党が長安城に蟠踞した際⁽³⁶⁾も、山東出身者を主体とする彼らが飢餓状態に陥って東へ撤退するところへ、待ち伏せ攻撃を仕掛けて降伏に追い込んでいる(紀元二七)。

史書に残る当時の長安の糧食不足は、略奪などが原因ではなく、王莽失政による長安を中心とする広域物流システムの崩壊が原因である。⁽³⁷⁾前漢王朝は、西北方面に対する国防上の需要もあり、常に京畿・關中地区の人口を充実させるため、外地より大量の人員を同地に移住させ、または駐屯させてきた。その人口数が必要とする糧食需要は、当該地区の農業生産によって賄える水準を大幅超過してしまい、前漢・武帝期より、これを補うため、黄河下流域より舟運⁽³⁸⁾によって大量の糧食を供給し体制維持する有様であった。物流網維持には、膨大な労働力を要し、これら労働力は、唯一王朝權威の維持によつてのみ、かろうじて逃散を免れ、維持されてきた。王莽

の失政によって、この王朝威信は地に墮ち、王朝の強権で、無理やり關中地区に居住させられていた外来民衆・兵卒は、殆どが郷里へと逃げ帰った。⁽⁴⁾物流の担い手を失った長安とその周辺地域は、中国の首都を担えるだけの地力・労働力いずれも失ってしまったのである。恐らく光武帝は、中国平定を達成した後の、自身四度目の長安視察・周辺諸地域視察によって、これら現実を目の当たりにし、長安王朝再建の不可能を悟り、正式な洛陽定都を決断したものと思われる。

五、本文結論

本文は、後漢王朝歴代皇帝による旧畿巡行の分析結果をもとに、以下の提言を行う。

- (一) 後漢皇室の旧畿巡行慣習は、王朝創業者・光武帝による、前漢王朝の権威・栄光を政治利用しようとする試みより始まった。
- (二) 二代・明帝以降の歴代皇帝の旧畿巡行は、表面上、皇室の列祖列宗を祀る儀式であるが、実際上は、

王朝創業者・光武帝の足跡を偲び、讃えるために行われたと看做すことができる。

- (三) 後漢王朝の存立が、栄光の前漢王朝復興を起点としていたため、光武帝の全国平定以後も、比較的長期にわたって、「定都」の問題が王朝の宿題となっていた。

- (四) 史書の旧畿巡行記録には、「定都」問題に纏わる当時の王朝内の様々な試行錯誤が描かれ、これらは当時の王朝内の権力闘争の実態を解明する手がかりである。

注

- (1) 六四 觀國之光, 利用資于王。(『象』曰觀國之光, 尚賓也。)(李學勤主編『十三經注疏・周易正義』(點校本) 北京大學出版社, 一九九九年, 九九頁より引用)
- (2) 単語「觀光」の、日本における普及過程および語義形成について、本文は、溝口周道の学説に従う。溝口周道「觀光」の語源について」載『日本觀光研究学会第二五回全国大会論文集』二〇一〇年、一二一—一二四頁参照。
- (3) 鶴田雅昭『觀光学入門』日本經濟評論社、二〇一二年、一一

一二二頁参照。

- (4) 今回考察対象とした後漢皇帝による旧畿巡行は、すべて『後漢書』の「帝紀」より抽出した。抽出作業には「南朝宋」范曄『後漢書』（點校本）中華書局、一九六五年一版を用いた。
 - (5) 王莽の行跡については、「後漢」班固『漢書』（點校本）中華書局、一九六二年一版、卷九九「王莽傳」四〇三九—四一九六頁を参照。
 - (6) 光武帝の行跡については、前掲書四、卷一「光武帝紀」一一—九四頁を参照。
 - (7) 洛陽の象徴的価値の兩漢時代民衆心理に対する影響について、本文はLoeweの学説に従う。Edited by Twitchett, D. & Loewe, M. *The Cambridge History of China Volume 1*, Cambridge University Press 一九八六年、一二二頁参照。
 - (8) 現在の四川省一帯。
 - (9) 現・甘肅省東南部一帯。渭水上流部に位置する。
 - (10) 隗囂の行跡については前掲書四、卷一三「隗囂公孫述列傳」五一—五三二頁参照。
 - (11) 現・陝西省漢中市一帯。漢水上流部に位置する。渭水盆地からみて秦嶺山脈を挟んだ南側に当たる。
 - (12) 延岑の行跡については前掲書四、卷一三「隗囂公孫述列傳」五一—五三二頁参照。
 - (13) 公孫述が割拠していた蜀は、概ね現在の成都盆地一帯と考えられている。
 - (14) 公孫述の行跡については前掲書四、卷一三「隗囂公孫述列傳」
- (15) 五三三—五四八頁参照。
 - (16) 前掲書四、卷一九「耿弇列傳」七〇三—七四四頁参照。
 - (17) 前掲書四、卷一三「隗囂公孫述列傳」五二六頁参照。
 - (18) 前漢王朝十一人の皇帝陵墓。概ね当時の長安城の東側郊外に造営されている。
 - (19) 咸陽市東側郊外に造営されている。
 - (20) 明帝の行跡については、前掲書四、卷二「顯宗孝明帝紀」九五—一二八頁を参照。
 - (21) 当時長安城内に存在した漢王朝開祖劉邦（高祖）を祀る廟。前掲一八の長陵とは別の造営物。
 - (22) 現・山西省西南部一帯。
 - (23) 現・陝西省咸陽市彬縣、旬邑縣一帯。
 - (24) 前掲書四、卷八〇「文苑列傳」引『論都賦』二五九六—二五九七頁、云「凄然有懷祖之恩，嗚乎以思諸夏之隆。遂天施雲遊，造舟于渭，北旆涇流。」又李賢注云「爾雅曰「天子造舟。」」
 - (25) 冀朝鼎『中國歷史上上的基本經濟區與水利事業的發展』中國社會科學出版社、一九八一年、二一—二十四頁、七八頁参照。
 - (26) 兩漢時代、京兆、左馮翊、右扶風と呼ばれた長安城周辺地区。前掲書二四における前漢王朝關鍵經濟區に含まれる。
 - (27) 班固の『兩都賦』発表は、章帝元和年間（紀元八四—八六）であったとする説が有力である。また班固は、宮室の長安回廊に肯定的であったとされる。費振剛・胡雙寶・宗明華輯校『全漢賦』（點校本）北京大學出版社、一九九三年一版、三一—

三四二頁参照。

- (27) 關中地区の地理範圍について、本文は史念海(一九二二—二〇〇一)の定義に従う。史念海「古代的關中」載『河山集』三聯書店、一九六三年、二七頁参照。

- (28) 前掲書四、卷四七「班梁列傳」一五八七—一五九〇頁；同、卷五一「李陳龐陳橋列傳」一六八七—一六八八頁参照。和帝、安帝治世下鄧氏專權期の朝政については、東晋次「後漢中期政治史試論—鄧氏專權を中心に」載『愛媛大学教育学部紀要』第二部一七、一九八五年、五七—七三頁を参照。

- (29) 前掲書四、卷一「光武帝紀」一一九四頁、同、卷一一「劉玄、劉盆子列傳」四六七—四八九頁参照。四人の劉氏称帝者とは、王莽政權に対する叛乱軍が担ぎ上げた劉玄、劉盆子(紀元一〇—没年不詳)、梁王劉永(生年不詳—紀元二七)、そして劉秀(光武帝)である。因みに劉玄は前漢景帝(在位前一五七—前一四二)の子・長沙定王劉發(生年不詳—前一二九)の後裔で南陽劉氏の本流に当たる。劉盆子は、城陽景王劉章(前二〇〇—前一七七；高祖劉邦の庶子・劉肥(前二二—前一八九)の子)の後裔、劉永は前漢文帝(在位前一八〇—前一五七)の嫡次子(前漢景帝の同母弟)・梁孝王劉武(生年不詳—前一四四)の後裔である。これらに対し劉秀は南陽劉氏の傍流の出で、四人中家格は最も下となる。次代劉氏皇帝の座をめぐる競争の中にあつて、この家格劣勢を挽回するため、光武帝はいち早く洛陽をpushした可能性がある。

- (30) 河南省靈寶市に城址がある。中国では昔から函谷關を、洛陽

を中心とする關東地区と、長安を中心とする關中地区の境界と看做し、また、前漢時代は、東から長安へ進軍してくる敵の通行を阻む防御の要とされてきた。

- (31) 現代中国では、前漢・後漢の呼称はあまり用いず、主に西漢・東漢と呼称する。これは前漢の首都・長安を伝統的に西京(西都)、後漢の首都・洛陽を伝統的に東京(東都)と称していたことに因むという。

- (32) 前掲書四、卷八七「西羌傳」二八六九—二九〇八頁；同、卷八九「南匈奴列傳」二九三九—二九七八頁参照。

- (33) 前掲書二八の東晋次の学説を指す。

- (34) 本文作者管見の兩漢時代黄河中流域氣候變化に関する學術文献は次の通り。蒙文通「古史飄微」巴蜀書社、一九九八年；文煥然「秦漢時代黄河中下游氣候研究」商務印書館、一九五九年；譚其驥「何以黄河在東漢以後會出現一個長期安流的局面」載『學術月刊』一九六二年第二期；竺可楨「中國五千年來氣候變遷的初步研究」載『考古學報』一九七二年第一期；王子今「秦漢時期氣候變遷的歷史學考察」載『歷史研究』一九九五年第二期；陳業新「災害與兩漢社會研究」上海人民出版社、二〇〇四年。

- (35) 「清」趙翼「廿二史劄記」(點校本)中華書局、一九八四年一版、卷三「王莽時起兵者皆稱漢後」七二—七三頁、云「…歴觀諸起業者、非自稱劉氏子孫、即以輔漢為名、可見是時人心思漢、舉天下不謀而同。是以光武得天下之易、起兵不三年、遂登帝位、古未有如此之速者、因民心之所願、故易為力也。」(…決起し

た者たちを見渡してみると、劉氏の子孫を自称するのではなく、漢を輔けることを決起の名目としており、これを見るに、この時人心は漢を思い、天下が、はからずもこの思いで一致していたのである。光武帝が易々と天下を手に入れることができたのはこのためであり、決起後僅か三年足らずで帝位に登り詰めるなど、以前ではありえない速さであり、じつはこれは、民心の望むところであり、ゆえに光武帝は、容易に力を得たのである。

- (36) 一方で、当時光武帝が、長安の劉氏称帝者(劉盆子)の存在に対して、自身が輿論の支持を失わぬよう、部下に対し長安進撃を敢行してこれを排除しよう督促していた記録も残る。前掲書四、卷一六「鄧寇列傳」六〇四頁、云「建武二年、光武)帝以關中未定、而(司徒)鄧禹久不進兵、下敕曰「司徒、堯也；亡賊、桀也。長安吏人、邊邊無所依歸。宜以時進討、鎮慰西京、係百姓之心。」(建武二年、光武帝は)關中が未だに掌握できず、しかるに(司徒)鄧禹は久しく兵を進めないで、詔勅に曰く「司徒は堯であり、賊徒は桀である。長安の官吏や住民は戦火にさまよい、帰るところがない。時機を逃さず速やかに進撃し、西京を鎮撫し、人々の心を繋ぎとめよ。」(と発した。)

- (37) 光武帝が後年、この時の策戦について周囲に語った内容と思われるものが残る。前掲書四、卷三三「朱馮虞鄭周列傳」一一三九頁、云「往年赤眉跋扈長安、吾策其無谷必東、果來歸降。」(往年、赤眉が長安にて跋扈したが、わたしは彼らに

兵糧無く、やがて必ず東へ退くと分かっていた。案の定彼らはわたしの軍門に降った。)

- (38) 前漢武帝執政期より王莽摂政期までの長安および京畿の公共事業、糧食調達状況、人口動態については拙稿「漢都東遷に關する一考察―「兩漢之際」の人口統計史料比較―」載「羽衣國際大學現代社会学部研究紀要」第二号、二〇一三年、七七―八四頁にて考察した。

- (39) 兩漢時代の黄河水運事業の形勢については、史念海「三門峽與古代漕運」載「河山集」三聯書店、一九六三年、二二二―二五二頁；王子今「秦漢交通史稿」中共中央黨校出版社、一九九四年、一五七―一六二頁；藤田勝久撰、徐世虹譯「漢代水利事業的發展」載「日本中青年學者論中國史」上古秦漢卷、上海古籍出版社、一九九五年、四三七―四七一頁を参照。

- (40) 前掲書五、卷二四「食貨志」一一一七―一一八八頁参照。

- (41) 葛劍雄「中國人口史」第一卷、復旦大學出版社、二〇〇二年、四一九―四二五頁、五二三―五二六頁；葛劍雄「中國移民史」福建人民出版社、一九九七年、二五四―二六〇頁、二六八―二六九頁参照。

